

## 茂吉短歌―「地獄極楽図」『赤光』から(一)

大月 和彦

ペンクラブの読書会で短歌を鑑賞することになり斎藤茂吉(明治一五年〜昭和二三年)を取り上げた。テキストに茂吉の高弟佐藤佐太郎著『茂吉秀歌』(岩波新書)を使った。

茂吉の膨大な作品の解釈、評論や短歌史上の評価については、多くの研究者や評論によって論じられている。生い立ち、人柄や性格、作歌の態度、家族関係などは北杜夫や斎藤茂太などの小説や随筆に描かれている。

茂吉二三歳から三一歳までの作品を収載した最初の歌集『赤光』は、写実を基調にしながら感情をあらわす生命感に満ちた歌集として反響を呼んだ。歌集の名は、阿弥陀経の中で極楽浄土の描写している「池中蓮華大如車輪、青色青光黄色黄光赤色赤光白色白光」から採った。子どものころ聞いたこの経典のことを茂吉はのちのち聞き覚えていたという。

『赤光』の冒頭部に収載されている「地獄極楽図明治三九年作」の四首は、山形県金瓶村の宝泉寺で盆と正月に村人に公開される地獄極楽の絵図を見て強烈な印象を受け、後年高校生の際に回想して詠んだ歌である。

白き華しろくかがやき赤き華あかき光を放ちあるところ

青い色の花には青い光が射して青く輝き、黄色の花には黄色い光、赤い花には赤い光、白い花には白い光が輝いている。極楽浄土の蓮池の光景を描く。

次の三首は、地獄に墜ちた死者が、飢えや炎熱、血の池で苦しむ様子を描いたもの。

赤き池にひとりぼっちの真裸のをんな亡者の泣きあるところ

飯の中ゆとるとると上る炎見てほそき炎口のおどろくところ

いろの色の鬼ども集まりて蓮の華にゆびさすところ

「地獄極楽図」は、子規が釈迦涅槃図を見て詠んだ「木のもとに臥せる仏を打ちかこみ象蛇どもの泣き居るところ」―入滅した釈迦の死を嘆き悲しんで、象や蛇などの動物までも泣いている―をマネしたものと本人が書簡に記している。

茂吉は、生家隣の宝泉寺の住職佐原隆庵師から習字や漢文を学び、その人柄と学識から大きな影響を受けたといわれる。